

## 第4節 実相寺古墳群に所在する二基の石棺について

田中裕介（別府大学）

### 1 はじめに

大分県別府市実相寺遺跡公園には、戦後この周辺で発見された考古資料が集められている。箱式石棺や横穴式石室などとともに公園内に置かれている二基の石棺材も、周辺の開墾時あるいは道路開削時などに出土したものである。この公園に移動した経緯は不明であるが、すでに古くから知られていた。この実相寺公園所在の石棺を実測図とともに初めて紹介したのは清水・高橋 1982 である（註 1）。その論文のなかで実相寺石棺は二棺共に、阿蘇溶結凝灰岩を利用したものではなく、両石棺とも安山岩系統の石材が用いられていることを指摘した。のちに九州の刳拔式石棺を集成した若杉竜太は、ともに刳拔式の家形石棺として両者に実相寺 1 号石棺、2 号石棺という名称をあたえた（若杉 1997）。本稿でもその名称を踏襲する。

この石棺を改めてここで紹介する理由は、ひとつにはこの二つの石棺の素材となった石材が地元のそれもごく近くの別府市内から採取された石材であることが指摘されたことにある。さらに実測の結果、石棺の細部についての詳細が判明したことによる。

本稿ではその経緯を含めて実相寺古代遺跡公園に所在する二つの石棺を紹介し、その特徴を記述したうえで、製作年代と被葬者像を考察する。

### 2 資料

#### (1) 石材

この二つの石棺はいずれも同じ石材が用いられており、大型の角閃石を多量に含み灰白色で気泡がめだつ柔らかく比較的軽い石材である。素人目にも大分県南部で通常石棺材としてもちいられる阿蘇溶結凝灰岩とは異なっている。大分県内で発見されている刳拔式石棺の中でこの石材を用いるのは実相寺石棺の二例が唯一である。そのことはすでに清水・高橋 1982 において「安山岩系統の石材」を用いると違いが指摘されていた。（註 2）。そのご近隣に所在する春木芳元遺跡<sup>はるきよしもと</sup>の 5 世紀後葉の箱式石棺の石材が「凝灰岩質安山岩」であって実相寺山に同質の石材の露頭がみられることが指摘されていた（下森 2007）。

そこで 2012（平成 24）年 5 月に大分県速見郡日出町在住で別府周辺の石材に詳しい大分県地質学会副会長の堀五郎氏に石棺石材を見ていただいた。その結果、両石棺の石材は角閃石安山岩あるいはデイサイトで、別府市内では実相寺山の山体と、上人地区の丘陵の 2ヶ所に分布し、同じ石質は由布市にも分布することの教示をうけた（註 3）。実際に実相寺山にしてみると、さほど広くない山体の斜面に石棺と同一の石質と独特の海蝕痕跡をもつ大型の石材がところどころに露出していることが判明した（写真 8）。そこには石棺材に手ごろな自



写真 8 実相寺山露頭

動車大の石も多い。さらに玉川剛司氏と上野淳也氏のこれまでの調査によって、同じ石材による遺構として、実相寺古墳群の鷹塚古墳石室閉塞石、天神畑1号墳石室閉塞石、春木芳元遺跡箱式石室石棺材、鬼ノ岩屋2号墳の閉塞石、鬼ノ岩屋1号墳の石室石材のほとんど、などの古墳の構造物に使用されるほか、鷹塚古墳墳丘上の鎌倉時代の石仏や、実相寺山周辺の中世石塔や近世の石塔にこの石材の使用が散見されることを教えていただいた。以上の事から実相寺石棺はその実相寺山の山体を構成する角閃石安山岩の転石を利用したものと強く推測された。

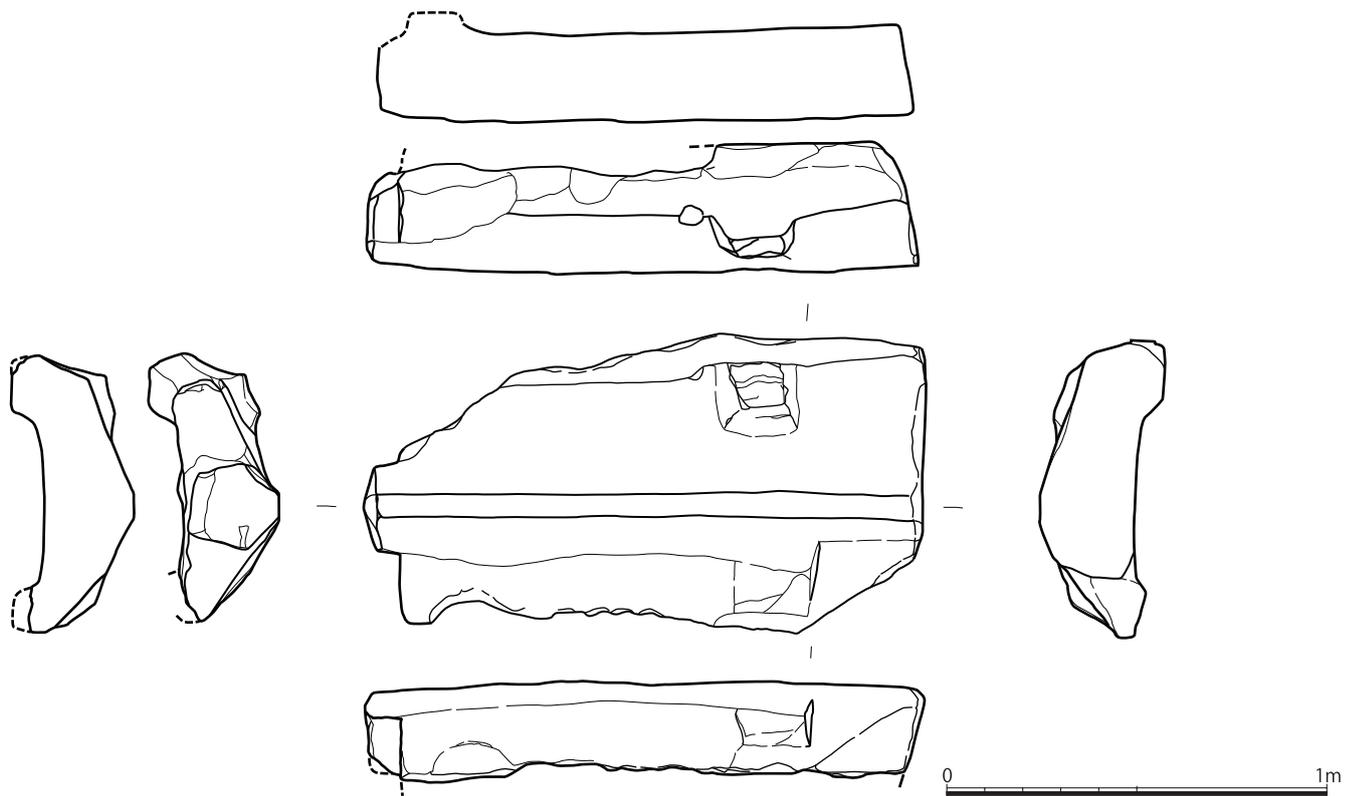
#### A 実相寺1号石棺（図94、写真9）

現在実相寺遺跡公園内に置かれている角閃石安山岩製の刳抜式石棺の棺蓋である。今回棺蓋の切断面を観察したところ、割れているのではなく、短辺と平行になるように丁寧に調整されていることが観察された。したがって別の部材に短辺縄掛突起を彫りだして、組み合わせて使用されたと推定される。つまり現存する棺蓋は、1：2程度の比率で当初から分割されて作られた棺蓋材のうちの大きな方の棺蓋であると考えられる。縄掛突起は側面に1ヶ所ずつ2ヶ所、短辺に1ヶ所あり、いずれも方形の突起で、短辺の突起は棟上面に連続して作られているため正面から見ると五角形に見える。短辺の突起は本来の形態をよく残しているが、側面の突起は現状ではほとんど突出しない程度に剥離している。棟は短辺の縄掛突起の上面からそのまま幅5cm程度の平坦面を明瞭に造り出しているが、平面位置をみると中軸上ではなくやや偏っている。棺蓋の幅は短辺付近で70cm弱、側面の縄掛突起の付近で75cm程度である、棺蓋の長さは、小の部分の棺蓋がないので全体の大きさは確定できないが、側面の突起が棺蓋全体の中央に位置すると仮定すれば、短辺のラインと突起の中央の距離がほぼ100cmとなるので、その倍の200cmが棺蓋本体の長さで、さらに短辺の縄掛け突起が両側に合わせて15cmほど突出していると想定される。したがって本来大小の棺蓋を組み合わせて215cm程度の長さで復元される。短辺側の平面形は方形に作られ、内面にはやや浅い断面台形の深さ10cmの掘りこみが幅50cm長さ115cmほど掘りこまれている。棺蓋内面の彫り込みの下からみた平面形態は角が取れた円形である。この特徴は大野川中上流域の舟形石棺に見られる特徴であることは井大樹氏から教示をうけた。

以上形態の特徴をまとめると、①縄掛突起の形態と位置は、方形突起、1・1型式。②断面は、棟の平坦面が明瞭な屋根形（平坦面指数は10以下）だが、全体的に低い。③短辺の縄掛突起が棟続きの高い位置にある。④分割製作された大小二つの石材を組み合わせて棺蓋とする。⑤平面形は長方形だが、内面の彫込み平面形は長円形であると指摘できる。

#### B 実相寺2号石棺（図95、写真10）

同じく実相寺遺跡公園内の1号石棺のそばに置かれている家形石棺の棺蓋である。現在別府市教委に所蔵の1976（昭和51）年に吉留秀敏によって作成された実相寺古墳群の測量図には、天神畑古墳南側の位置に「池造成中に石棺出土」という記載があり、その付近には現在でも大型の石材が露出しており別の横穴式石室古墳が存在した可能性が高いことはすでに上野淳也氏によって指摘されている（前者が天神畑1号墳、後者が天神畑2号墳）。当時の聞き取りと思われるその情報が正しければ、実相寺2号石棺はその横穴式石室墳に内蔵されていたという想定が成り立つ。石材は同じく角閃石安山岩製である。半分が欠失しており、短辺中央に1カ所、側面に1カ所ずつ横長の長方形の縄掛突起がつけられ、突起上面は石棺斜面部の上方に向かってハの字状



第 94 図 実相寺 1 号石棺 (1/20)



写真 9 実相寺 1 号石棺

に狭まりながら伸びている。側面の突起の位置から推定して本来この石棺には短辺に 1 カ所ずつ、側面に 2 カ所ずつ突起が存在した 1・2 型式の配置であると考えられる。突起はすでに欠失しているが、もっともよく残っている側面の突起をみると、垂直面から 10cm ほど飛び出すようである。棺蓋の幅は約 110cm、長さはおおよそ 115cm 分が残されている。高さは 38cm、垂直面の高さは場所によって異なるが 15～18cm である。上部平坦面の幅は 57cm、天井部の厚さは 22cm をはかる。側面は短辺部を中心に石材特有の亀裂が横方向に重なり表面全体が磨滅している。これはこの石材独特の海蝕の痕跡で、実相寺山の転石に頻繁に観察され、石棺材の産地推定の根拠の一つである。

平端面指数は  $57 \div 110 \div 52\%$  であり、かなり広い。かつて増田一裕氏はこの点に着目して(増田 2004)、実相寺 2 号石棺を氏の設定した畿内系家形石棺編年第 4 期第 2 段階すなわち須恵器

TK217 型式の時期にあたる可能性を示唆した。内面はしっかりとして台形の掘り込みが行われている。縄掛突起はいずれも斜面から出て、垂直面の半ば以上に達する長方形のつくりで、突起上面の斜角度は 20 度ほどの角度で下に傾斜する。突起の幅は短辺突起で 30cm、側面突起は 25 cm である。

以上の形態の特徴をまとめると、①縄掛突起の配置は短辺 1 カ所、側辺 2 カ所の 6 突起と推定される。②平端面がきわめて広い（平坦面指数 52）。③縄掛突起は長方形で、上面が下に傾斜して垂直面に及ぶ。以上の特徴からみて 2 号石棺は、実見した多くの方が指摘したように畿内系の家形石棺である（註 4）。

### 3 特徴

#### (1) 1 号石棺の型式と特徴 舟形石棺あるいは組合せ式家形石棺

##### A 石棺蓋の型式について

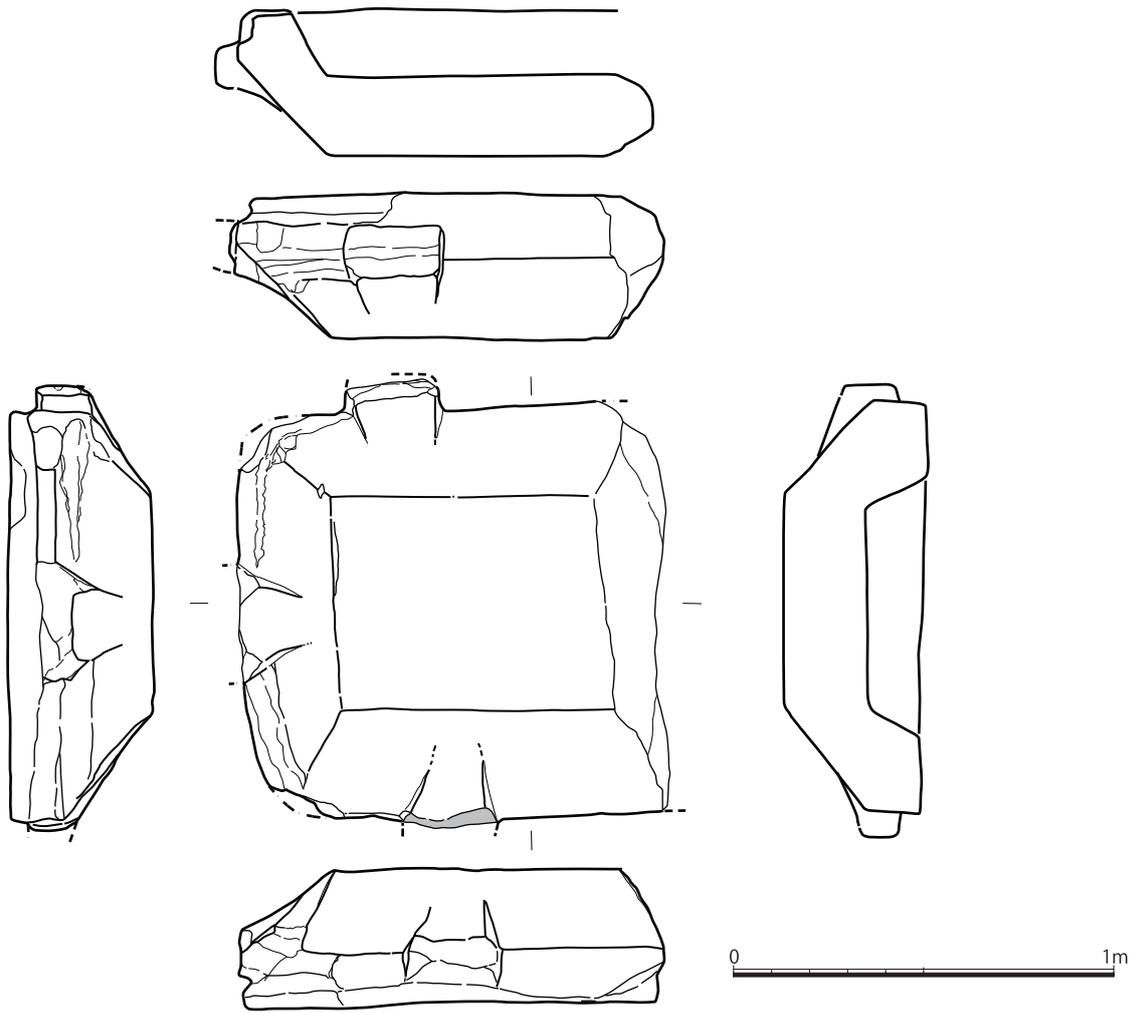
舟形石棺と家形石棺の双方に近似例がある。舟形石棺としては大分県豊後大野市鉢の窪 3 号墳舟形石棺、宮崎県延岡市小野寺田石棺が類似し、いずれも中期後半と考えられている。組合せ式家形石棺としては、宮崎県延岡市南方 23 号墳石棺、吉野 5 号墳石棺、6 号墳石棺など後期初頭の例が類似する。

##### B この棺蓋に組み合う棺身について

棺蓋の小口にあたる短辺平面の形態が円形ではなく方形になることからみて、棺身は平面形が長方形で短辺部分が直線的な構造になることが想定される。そのような構造であれば刳抜式の舟形石棺の棺身でも家形石棺のそれでもありえる。さらに組合せの石棺の棺蓋になる可能性も指摘できる。ことに比較的隣接する春木芳元遺跡において発掘され箱式石棺と報告された 1 号棺は、石材が実相寺 1 号石棺と同一であること、発掘時棺蓋がなかった上に、石棺の上面寸法が、外側で測って長さ 200cm、幅 70～80cm で、現存する実相寺 1 号石棺の想定寸法とほぼ一致し、さらにその箱式石棺のあつらえ方は下部から上方に向かって小口板と側板をハの字形に立てて安定させる形式で、しばしば西九州の組合式家形石棺にみられる方法である。共伴した須恵器から春木芳元遺跡の石棺の築造時期は須恵器 TK23 型式期であり、時期的にも十分この型式の石棺棺蓋が存在しうる時期である。明確に証明することはできないが、石材の一致、寸法の一致等から、実相寺 1 号石棺棺蓋は一つの可能性として春木芳元遺跡 1 号棺の棺蓋である見解を提出しておきたい。

##### C 分割製作された棺蓋について

大分県内においては旧大分第 1 高女所蔵石棺（註 5）、大分市世利門古墳の組合式家形石棺の棺蓋と、豊後大野市鉢の窪 3 号墳の舟形石棺の棺蓋にみることができ、いずれも古墳時代中期中ごろから後半にかけての石棺であり、大分平野から大野川流域の南部内陸に分布する。さらに県外に目を広げると、熊本県内の組合式家形石棺と島根県の石棺の類例が存在し、遠くは和歌山県大谷古墳の組合式家形石棺にも見ることができる（日本考古学協会 2010）。棺蓋を分割製作する理由は、早くから指摘されてきたように（佐田・高倉 1972）、追葬を行う際の開棺の利便性のための工夫と考えられ、筑後平野や菊池川下流域などでは横口を設けることでこの問題に対応し



第 95 図 実相寺 2 号石棺 (1/20)



写真 10 実相寺 2 号石棺

たが、菊池川中上流域やそれ以南では棺蓋を分割製作することで、追葬に対応したものと考えられる。島根県の諸例と和歌山大谷古墳例がいずれも後期に下るのに対し、熊本県と大分県の諸例はいずれも、中期後半とされている。今のところ細かい前後関係を明らかにできないが、このようなアイデアが大分県内で自生したものか熊本県から伝わったものか不明であるが、大分県南部

の大野川中流域では箱式石棺の蓋石を分割製作して突起を削り出す蓋石の例が、豊後大野市鉢の窪3号墳（註6）と漆生古墳群大久保3号墳の棺蓋（田中2014）で知られているので、大分県内でそのような技法が舟形石棺や家形石棺の棺蓋に採用される条件が中期後半にはすでに成熟していたといえる。

## （2） 2号石棺の型式と特徴 畿内系家形石棺

### A 棺蓋の型式と時期

短辺に1カ所、側面に2基の縄掛け突起を有する型式は、6世紀後半から7世紀前半の家形石棺に共通する様式である。そのなかでも平坦面指数は52で極めて広く、畿内で製作された縄掛け突起を有する家形石棺のなかにおくと、もっとも新しい部類に入る（増田2004、太田2005）。縄掛け突起の位置と形状を太田2005の分類に適用すると6類と3b類にあたり、これももっとも新しい一群であたるので、7世紀でも中葉に近い前半となり須恵器形式で言えばTK217型式期の石棺と考えてよいのはなかろうか。

### B 石棺の大きさについて

半分に折れているので正確な長さは不明だが、幅は110cmで、これを石橋2013の規模の分類に当てはめるとD類とされた棺蓋長200～240cm、幅70～140cmに範囲に入り、もっとも類例の多い一群にあたる。東九州に所在する畿内系の家形石棺で古墳時代後期後半から終末期の石棺の規模は、福岡県みやこ町綾塚古墳の家形石棺が長さ252cm幅144cmの大型であるのに対して、大分市丑殿古墳石棺は長さ230cm、幅100cmとかなり小さく、実相寺2号棺はその大きさでは丑殿古墳に近く、石橋分類でA類に近い大きさの綾塚古墳石棺に比べると、一ランク下の大きさ石棺と言える。これはまさにこの時代の実相寺古墳群の首長の畿内王権中枢からみた政治的位置を表しているといえよう。豊前において最大規模の墳丘規模（円墳41m）と石室規模を有する綾塚古墳（玄室面積約12.5㎡）は、石棺の大きさからみても大型と言え、7世紀前葉という築造時期から推して、被葬者は豊前地域を統括した国造級の首長と考えられる。これに対して実相寺2号棺は大分平野の丑殿古墳石棺と同規模であり、綾塚古墳と匹敵する墳丘と石室をもった豊後の国造級の古墳である鬼ノ岩屋2号墳（円墳37.5m、玄室面積12.9㎡）と鷹塚古墳（方墳25m）の直接の後継墳でありながら、その石棺からみた地位は国造級とはみなしがたい古墳に変化しているといえる。

## 4 石質と石棺形式

現在角閃石安山岩製の石棺が分布するのは別府地域の2例だけである。大分県内の削り抜き式石棺は別府市以外ではすべて阿蘇溶結凝灰岩製である。したがって、この石材を恒常的に用いて石棺などの石製品を製作する土着の工人が登場するのは中世以降といえ、古墳時代には外来の石工が、地元の協力のもとに製作したと考えられる。そして石棺形式をみると、1号石棺は大分県南部の石棺と特徴を共有し、2号石棺は畿内型の家形石棺そのものの型式である。この事実はそれぞれ製作された時代は異なるにもかかわらず、この地域の首長墓に使用する石棺製作のために、他地域で経験を積んだ工人が、この地にやってきて在地の石材で石棺を製作したことを物語っている。実相寺1号石棺の場合は、その特徴から大分市内あるいは大野川流域の阿蘇溶結凝

灰岩で経験を積んだ工人が、移動してきて実相寺山の石材を使って製作したものであり、このような工人の移動例の指摘としてはつとに、古墳時代中期の鹿児島県唐人大塚古墳と神領10号墳の舟形石棺が、志布志湾の石材を用いて、宮崎県延岡市付近の工人が移動して製作したと指摘した橋本達也の研究（橋本2005・2016）がある。実相寺1号石棺の例は、比較的近距離ではあるが、工人が移動を仰ぐことで別府の首長が大分南部の首長との関係を持ったことを示している。いっぽう2号石棺の場合は、播磨の竜山石あるいは大和の二上山で家形石棺製作に携わった工人が別府まで移動して、実相寺山の石材を使って製作したと推定される。畿内の王族・豪族と同じ形式の家形石棺を用いることにより畿内の王権との関係の強さを周囲の首長に示す役割を果たすとともに、その大きさが国造級の大きさよりは1ランク下のものであったことからみて、石棺に葬られた首長さらにその系譜に連なる別府の豪族の地位を王権がそのクラスに位置づけたという意味で、石棺工人の移動は王権による地方首長の位置づけを行うという政治的行為にともなうものであったことを示している。

## 5 まとめにかえて ―石棺からみた別府の古墳群―

大分県南部は阿蘇溶結凝灰岩が豊富な地域であり、そこからやって来た石工が凝灰岩の代わりに軟質の実相寺安山岩を使ったことは確実であり、古墳時代中期後半には石工の移動を通して別府の首長と豊後南部の首長の間に関係が結ばれたものと推定される。

その後1世紀近い年月を経て、古墳時代の後期後半には別府には石室規模と墳丘形態や規模において豊前の甲塚古墳・橘塚古墳・綾塚古墳に匹敵する鬼ノ岩屋2号墳や鷹塚古墳といった国造級の首長墓古墳が築かれる。豊後南部にはこの2古墳に匹敵する古墳がないところから見て、その関係は1世紀前とは異なり別府地域の首長が優位に立っていたものと推定される。そして実相寺2号石棺はその後の別府の首長の様子を物語る。すでにその規模は国造の支配下の一首長クラスの石棺となっているが、畿内系家形石棺を用いたところから畿内の王権と深いつながりを維持していたことは明らかである。その後速見郡衙がこの別府に作られていくことから考えると、律令期の速見郡の郡司に実相寺古墳群の被葬者の後裔が任命されたことは想像に難くない。彼らが速見郡の郡司層になっていく背景には、その前代の畿内王権との石棺に現れたような関係の強さがあったものと考えられる。

しかし奈良時代には大分郡となる現在の大分市内に古宮古墳が7世紀後半に築造されていることから、豊後における国造的地位は、実相寺古墳群の所在する速見郡から大分郡の首長に移ったものと考えられる。

本文の作成にあたり、石棺の実測を共におこなった権丈和徳・崎谷裕紀、トレースを行った奥彩香・北原美希（当時別府大学院生）、石材について教えていただいた堀五郎先生、実相寺古墳群の発掘調査を担当された上野淳也（別府大学准教授）、玉川剛司（別府大学文化財研究所）、大分県内の資料について有益な教示をいただいた井大樹（大分県教育庁埋蔵文化財センター）に感謝する。

## 註

- (1) 石棺については1960年代頃からその存在が知られていたが、清水・高橋1982まで調査されることはなかった。その後1985年刊行の『別府市誌』において実相寺石棺の写真と実測図が紹介されるが、1号棺の代わりに鬼ノ岩屋2号古墳の石屋形の棺蓋の実測図が誤って挿入されている。記述も簡単で、いっぽうの石棺は阿蘇溶結凝灰岩製と記されている(富来隆・佐藤堯1985)。
- (2) 大分県内所在の石棺の研究は資料が豊富な阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺に関心が集中したため、実相寺石棺に対する言及はなく(神田1990、林田1995)、残念ながら2010年の日本考古学協会兵庫大会の「古墳時代の棺とその歴史的意義」分科会の石棺集成でも修正表から落ちている。
- (3) 最新の地質図(星住ほか1988)によれば、実相寺山の地質は「溶岩(輝石角閃石デイサイト)」解説には「普通輝石黒雲母含有紫蘇輝石普通角閃石デイサイト」と記載され、白色のやや発泡したデイサイトで大きさ2~8mmの斜長石・普通角閃石を顕著に含むとされる。
- (4) 前田達男(前田1986)は、縄掛突起が小型にすぎること、外広きする形状や両側面の突起位置の非対称などから、畿内の直接的影響によるものではないと早く指摘していた。しかしこれは、在地の石材を用いて畿内のデザインの石棺を製作したことによる施工上の変異であって、石工が当時の畿内の石棺型式をほぼ忠実に製作していることを評価して、その意味で畿内からの直接的影響のもと製作されたと考える。
- (5) 現在所在不明になっている旧制大分高女所蔵石棺は、その後の大分の古代朝鮮文化を考える会の方々の聞き取り調査によって、大分市万寿山古墳群から明治時代末年に土地所有者によって発見搬出されたことが判明している。ちなみに若杉1997では「蓬莱塚付近石棺」として記載されている。
- (6) 鉢の窪3号墳には現在墳頂に2基の主体部が並置されており、一方が舟形石棺、一方がこの箱式石棺である。

## 文献(発表年代順)

- 佐田茂・高倉裕彰1972「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』古城山古墳調査団  
清水宗昭・高橋徹1982「大分の石棺」『九州考古学』56九州考古学会  
富来隆・佐藤堯1985「ふるさとのあけぼの」『別府市誌』別府市  
前田達男1986「別府市実相寺所在の家形石棺」『石垣考古』創刊号石垣古文化研究会  
柳沢一男1987「石製表飾考」『東アジアの考古と歴史』下岡崎敬先生退官記念論集同朋舎  
星住英夫・小野晃司・三村弘二・野田徹郎1988「別府地域の地質」『地域地質研究報告5万分の1地質図福別府』地質調査所  
神田高士1990「大分の舟形石棺」『おおいた考古』3大分県考古学会  
林田和人1995「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』14宮崎考古学会  
若杉竜太1997「九州石棺考」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古学会  
増田一裕2004「家形石棺の基礎的分析(下)」『古代学研究』164古代学研究会  
橋本達也2005「唐人大塚古墳考」『鹿児島考古』40鹿児島県考古学会  
太田宏明2005「畿内系家形石棺の変遷と系統の統合」『古代文化』56-12古代学協会  
下森弘之2007『春木芳元遺跡古寺地区』別府市教育委員会  
第3分科会古墳時代の棺とその歴史的意義編2010「石棺集成資料」  
『日本考古学協会2010年度兵庫大会』研究発表資料集、同実行委員会  
三好栄太郎2010「九州一棺身構造の考察を含めて一」  
『日本考古学協会2010年度兵庫大会』研究発表資料集、同実行委員会  
石橋宏2013『古墳時代石棺秩序の研究』六一書房  
田中裕介2014「漆生古墳群第1次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教育委員会  
橋本達也2016『大隅大崎 神領10号墳の研究 I』鹿児島大学総合研究博物館

## 第5節 別府実相寺古墳群出土馬具の検討

桃崎祐輔（福岡大学）

### 1 はじめに

別府市では、次郎塚古墳・鷹塚古墳・鬼ノ岩屋古墳で若干の馬具が出土した。なかでも金銅装鏡板付轡は盗難で失われたが、本来は次郎塚古墳南側の横穴式石室の開口部付近から出土した可能性が高い。この地点からは、石室内から掻き出されたと考えられる金銅装鏡板付轡乃至杏葉の細片も出土した。また鷹塚古墳では、畿内産と考えられる TK209 古段階の須恵器群とともに、木製三角錐形壺鐙の残欠とみられる木質付着金具と兵庫鎖が出土した。また伝鬼ノ岩屋古墳出土品には、鉄地金銅張の辻金具もしくは雲珠の脚部片を含み、金銅製の責金具を伴う。本論では次郎塚古墳出土馬具類に注目し、散逸したものの復元的検討を含め3セットの内容を明らかにしたい。

### 2 馬具の発見と調査研究史

昭和33年6月8日の大分合同新聞は、「別府市九電別府変電所鈴木栄氏は実相寺遺跡の古墳跡北側畑地から約1500年前の古墳時代の馬具や矢ヅリを掘出した。特に馬の耳などに飾るぎょうよう（杏葉）は金をかなり含んだ、精巧な唐草模様が刻み込まれている。別府を訪れた九大鏡山猛助教授も「これほどそのままの形をして掘り出されたものは少く、貴重なものである」と折紙をつけており、鈴木氏は近く県の重要文化財として申請するといっている（写真左はぎょうよう右上はクツツ、下は矢ヅリ）」と報道した。この写真には、心葉形十字文忍冬文透鏡板一对、方形立間付素環鏡板付轡、鞍の鞍鉸具1点、鉄鏃片6点が写っており、太郎塚北西出土品とされてきた。馬具類のうち鏡板一对は昭和34年3月20日に大分県有形文化財「唐草文透彫鏡板」として指定されたが、別府市美術館に保管中の平成14年に盗難で失われた。なおこの金銅装忍冬文鏡板付轡は、『別府市史』に記載されたほか、大分県宇佐風土記の丘の図録類にしばしば写真が掲載され、レプリカも展示されていた。その後全国的な馬具集成を進める宮代栄一氏は大分県下の馬具についても集成を進めており（宮代栄一2012）、次郎塚古墳出土の心葉形十字文忍冬文透鏡板一对についても検討を進められているが、その成果はいまのところ公開されていない。

### 3 実相寺次郎塚古墳出土馬具の内容

昭和33年に太郎塚古墳北西畑地から出土した馬具類は、大分合同新聞掲載の写真によれば心葉形十字文忍冬文透鏡板一对、方形立間付素環鏡板付轡、鞍鉸具1点、鉄鏃片6点が確認できる。「唐草文透彫鏡板」一对は昭和34年3月20日に大分県有形文化財に指定されたが、盗難で失われた。

その後、平成19～21年度にかけて別府大学文化財研究所が発掘調査し、太郎塚古墳は径約23m・次郎塚古墳は径約24mの円墳と判明し、いずれも大規模な横穴式石室の内蔵が推定されるとともに、次郎塚古墳では鉄地金銅張鏡板もしくは杏葉の細片が出土した。共伴した須恵器類は、TK209期の新段階にあたる。また昭和33年の太郎塚古墳北西出土馬具は、実際は次郎塚古

墳の南側に開口する横穴式石室の前庭部付近に掻き出されていた遺物の可能性が高いと判断された。

心葉形十字文唐草文透彫鏡板は失われたが、盗難前に武末純一先生が撮影された鮮やかなカラー  
スライドがあり、そのうち最も鮮明な画像を選んで写真図版と書き起こし図を作成した。

心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡・鏡板 A (図 96-1): 総高 12.1cm、鏡板全高 8.2cm、最大幅 9.7cm、  
立間高 1.0cm、立間幅 2.8cmを測る。楕円形平面で下面に僅かな突起が設けて心葉形とし、中央  
に高さ 1.8cm、幅 2.5cmの楕円形の銜通穴を設けており、裏側の鉄地板側に縦方向銜留の剥離し  
た痕跡がある。残余の部分を十字形に四分割している。上半部の二区画では、上方から中央の銜  
通穴に垂下し、そこから外側に向かって屈曲し、更に内側に居り返して下縁の水平線に接して跳  
ね上がる構成をとるが、左右の細部表現は不対称である。これに対し下半部の二区画では、垂直  
二等分線の下寄りから派生した葉軸から鉤状の子葉を派生させて下縁に接し、外側に向かって大  
きくカールし先端が二股となって一部上縁の水平線に接して反転し、先端は下方の葉脈に接して  
いる。外縁を縁取るように 43 個の小ぶりの笠鉾を打ち、また楕円形の銜留孔の縁に十字形に四  
鉾を打つ。立間の突出は低く、そこに幅の狭い長方形の立間孔を設けて舌状の吊鉤金具をかける  
形をとる。吊鉤金具の中程には僅かなくびれがあり、ここに責金具を伴っていたと考えられる。

心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡・鏡板 B (図 96-2): 総高 10.6cm、鏡板全高 8.0cm、最大幅  
10.0cm、立間高 1.0cm、立間幅 3.05cmを測る。楕円形平面で下面に僅かな突起があり、中央に楕  
円形の銜通穴を設けており、裏側の鉄地板側に縦方向銜留の剥離した痕跡がある。残余の部分  
を心葉十字形に四分割している。上半部の二区画では、上方から中央の銜通穴に垂下し、そこ  
から外側に向かって屈曲し、更に内側に居り返して下縁の水平線に接して跳ね上がる構成をとる  
が、左右の細部表現は不対称である。これに対し下半部の二区画では、垂直二等分線の下寄  
りから派生した葉軸から鉤状の子葉を派生させて下縁に接し、外側に向かって大きくカールし  
先端が二股となって一部上縁の水平線に接して反転し、先端は下方の葉脈に接している。外  
縁を縁取るように 47 個の小ぶりの笠鉾を打ち、また楕円形の銜留孔の縁に十字形に四鉾を  
打つ。立間の突出は低く、そこに幅の狭い長方形の立間孔を設けて舌状の吊鉤金具をかける  
形をとる。吊鉤金具の中程には僅かなくびれがあり、ここに責金具を伴っていたと考えられる。

以上、心葉形十字文忍冬文透彫鏡板一对は、写真を見る限り、厚手の銅板に、薄肉彫りで切削屑  
を出しながら複雑な葉脈の凹凸を削り出し、輪郭に沿って縁部を薄く仕上げた立体的な唐草文を  
表現する。透彫にあたっては、文様の稜点に錐状の工具で穿孔し、そこから錆びた鉄線と竹ひご  
弓を用いた糸鋸で切り抜いたと推定される。A・B 鏡板のいずれも、特に下半部はモデルとなっ  
たアーカンスを巧みに表現する。しかし文様に毛彫・蹴彫の線條による加飾は認められない。  
以上、地板鉄板+薄手金銅板+銅製鍍金文様板+銅製鍍金縁金の 4 枚の金属板の縁部に密な穿孔  
を施し、これらを頭部径 3mm 前後の鍍金銅製の鉾で結合する構造と判断される。これは千賀久氏  
分類の「薄肉彫り」= a 類に該当し、唐草文の崩れが進み毛彫を省略する点は時期の下降を示す。  
金銅装馬具破片 (図 96-3): 次郎塚古墳前庭部出土の鉄地金銅張鏡板付轡もしくは杏葉の細片で  
ある。破片が小さすぎて全形が十分理解できないが、中央部に垂直直線状に垂下する部分からみ  
て、退化型式の心葉形三葉文馬具の立間直下部分の残欠と考えられる。但し鏡板では立間直下の  
鉾を欠くものをしばしば含むため、杏葉の可能性が高く、更に立間上面が舌状をなし、豎に 2 鉾

を打っていた状況が想定される。また垂直に垂下する隆帯の両脇には、本来は上向き鉤状の突起が表現されていたと推定される。全高約9cm、最大幅約9cm程度と推定される。鉄地板＋文様鉄板＋金銅板の3枚からなる1枚被せ技法を用い、径6mm程度の鉄地金銅板被せ技法で製作された笠鉾を僅か4～5点打ち込んで結合する。TK209新相～TK217期に下降する最新段階の型式である。

鞍鞍鉸具（図96-4）：新聞写真に併載された鏡板との対比から全長約11cmの鞍の鞍金具と判断される。全長約6cm、幅5cm弱の瓢形の鉸具の基部に全長5cm強の一脚が付き鞍の木質に打ち込んでいたと考えられる。上記の心葉形三葉文杏葉とセットである可能性が高い。

方形立間付素環鏡板付轡（図96-5）：新聞写真に併載された鏡板との対比から鏡板高約5cm、鏡板幅約6cm、銜幅14.5cm、引手長10.0cm以上の、鉄製方形立間付素環鏡板付轡と判断される。方形の立間がつく環状鏡板部には二連銜の銜外環が連結され、ここに引手内環も連結される。引手端は両方とも端部が欠損しているとみられ、引手壺の形状は不明。

#### 4 馬具の検討

##### （1）心葉形忍冬文の検討

次郎塚A・Bのような心葉形十字文唐草文透彫鏡板の研究は古く後藤守一氏により着手された。

岡安光彦氏は藤ノ木古墳出土馬具に刺激を受け、心葉形鏡板・杏葉を編年（1988、89）した。藤ノ木A組も含め、パルメット・鳳凰文をもつ杏葉と鏡板の多くを舶載品との立場をとる『斑鳩藤ノ木古墳』報告書では、藤ノ木古墳と最も近い馬具が出土した珠城山3号墳が、藤ノ木古墳と同じTK43型式の須恵器を伴う点から、6世紀後半までにおさまるとした（千賀久・鹿野吉則1990）。

小野山節氏は『馬具大鑑』解説で、藤ノ木は第IV期（6世紀中頃～末）にあて、中国北朝産であろうとの見解を示した（小野山1990）。

玉城一枝氏は、パルメット意匠を有する馬具の多くは中国・朝鮮文化圏からの将来品と考えた。またその根拠に、林永周著『韓国文様史』所載の忍冬文透彫鏡板を示し、韓国内の出土地不詳とした（玉城1996）。しかしこの鏡板は、『日本原始美術』収録の福岡県乗場古墳の鏡板轡の写真をトレースしたもので、半島製品説の論拠とならない。

内山敏行氏は、後期第4段階に現れる馬具として唐草文・鳳凰文心葉形鏡板付轡・杏葉を挙げ、「地板と厚手の縁金との間に金銅製の透彫文様板をはさむ。轡は鏡板の外側に二条線引手をつなぐ。文様は唐草・鳳凰・龍がある。文様が極めて精巧な輸入品（珠城山3号・静岡県御子屋原）を後4段階に倭で模倣し始める（一本松1号墳、檀原市妙法寺出土品）。終1段階には急速に小型・疎鈍化して文様が崩れ、消滅する。」「藤ノ木A組は文様板と縁金が一体で、杏葉が棘葉形である点が異なる。埋葬年代からみて後2段階に遡るので、後4段階の輸入品とは直接につながらない可能性がある」と述べる（内山敏行1996）。

千賀久氏は、列島の馬具を新羅系・非新羅系に大別し、藤ノ木セットのような鏡板の外側で二条線引手を伴う心葉形鏡板・杏葉類を新羅系とした。さらに薄肉彫り品(a類)・透彫り品(b類)

に大別し、b類を縁金に鋳を密に巡らすものとその模倣品（b1類）、縁金の要所にのみ鋳を使用するもの（b2類）に細分する。優品が多いa類は、鏡板が唐草文のみであるのに対し、杏葉は双鳳文・龍文・雲文唐草など多様である。初期の遺品では、藤ノ木古墳・珠城山3号墳は杏葉の鳳凰を細かな毛彫りで飾るが、時期の下降とともに毛彫りが省略され、鳳凰文以外の文様も採用されるという流れを読み取る。b類では、b1類の福岡・乗場古墳の鏡板は幅14.2cmと大きく、形体・文様は伝朝鮮半島出土の鏡板に近いとした（これは撤回される）。また熊本・才園古墳の杏葉は縁金・鉤金具ともに鉄地金銅張り製で、室ノ木古墳杏葉のような文様を模倣・改変したとみる。a類とb1類の多鋳打ちを省略したのがb2類に相当する。

a類は時期が下っても金銅製だが、b類は鉄地金銅張りに転換する。b2類の金銅製馬具には、朝鮮半島との中継点にあたる沖ノ島奉納品と壱岐笹塚古墳の副葬品が含まれ、列島内の類例が限られることから舶載品とする。よってa・b類の金銅製馬具は舶載品なのに対し、b1・2類の鉄地金銅張馬具はその模倣品で、出土例が集中する北部九州での模倣生産も想定した（千賀2003）。

桃崎は、飛鳥池遺跡のような倭の工房で、新羅・百濟・高句麗など、外来工人を中核とする国際的なプロジェクトチームがつくられ、中国系モチーフの情報も加味して藤ノ木Aセットが製作された可能性を指摘した（桃崎祐輔2003）。しかしその後、韓国昌寧末屹里遺跡の寺院跡窖藏遺構より心葉形十字文鏡板の縁金が出土したことを重視してa・b1類の金銅製馬具についての国産説を撤回、「新羅の調」として舶載されたとの考えに傾いた。しかし一方、諫早直人氏のように、藤ノ木のような馬具は、朝鮮半島内の製作技法が看取されるものの、異なる地域間の要素が複合するため製作地を特定地域に限定することは難しく、日本列島に渡来した複数地域出身の工人が協業して製作した可能性も依然として高いとして、桃崎の軌道修正を批判した（諫早直人2013）。

次郎塚古墳出土鏡板は、唐草文に彫り崩し技法を用いる点は千賀分類のa類だが、毛彫の加飾がない点は新相を示す。鈴木勉氏は、藤ノ木・珠城山3号墳・神宮徴古館所蔵品・福岡県金隈例が動植物の立体表現に彫崩技法を駆使し、毛彫で線彫りを表現するのに対し、室の木、賤機山、宮地嶽例には立体表現の意図が見られないとして両者に彫金技術上の大きな相違があるとする。次郎塚例は、a類で、子葉の立体表現を志向しつつも、省略が進んだ段階と考えられる。天理参考館には次郎塚タイプの唐草文鏡板がさらに退化少鋳化したようなb1類の鏡板付轡も存在する。

宮地嶽古墳出土遺物群の年代推定にあたり緑色ガラス板に注目したい。小田富士雄氏は、百濟の益山弥勒寺東塔跡付近で出土した「緑釉塊」が本来緑色鉛ガラス板であること、当寺で7世紀前半代の緑釉垂木先瓦が出土していることなどを根拠に、7世紀前半の弥勒寺創建期の所産である可能性を指摘し、宮地嶽古墳のガラス板も7世紀の所産と考えた（小田富士雄1980）。近年、弥勒寺西塔が解体調査され、舍利孔から金製舍利容器、奉納品とともに一辺23cmの緑色ガラス板が出土した。共伴した金製奉安記には、百濟王後の発願で己亥年（639）に舍利を奉安した旨を記す。なお弥勒寺伽藍では武王在位期間中の「丁亥年」（627）と「己丑年」（629）干支銘瓦が多数出土している。よって宮地嶽古墳の緑色鉛ガラスは、百濟武王の治世中に、百濟と倭の正

式な外交関係のもと「百済の調」として舶載された可能性が考えられる。

宮地嶽古墳で出土した新羅製らしい金銅装馬具類（池ノ上宏・花田勝広 2000）も前後する時期が想定され、『日本書紀』に見える 621・622・645・646 等の「新羅の調」「任那の調」にかかる可能性が考えられる。これに若干先行し、TK209 期の所産とみられる次郎塚古墳の馬具類も 600・610・611・621・622 年等の「新羅の調」「任那の調」にかかる舶載品ではないかと考える。

## （2）舶載品説と新羅の調

『前方後円墳集成』編年 10 期前半（MT85～TK43 型式期）は、古墳時代を通じて朝鮮半島系副葬品が最も濃密に認められる舶載品集中期とされ、内山敏行氏はこれを「舶載品ラッシュ」と呼んだ（内山敏行 2003）。末松保和氏は『日本書紀』に見える「新羅の調」・「任那の調」に注目し、倭国に服属していた伽耶は 562 年までに全域が新羅に併呑され、575 年頃までに、新羅王が任那名義の調を貢納する義務を課せられた。しかし履行は不十分で、倭国はその権利をしばしば確認する必要があったと考えた。鈴木英夫氏や山尾幸久氏はこの説を発展させ、新羅が大伽耶を併合する直前の 560 年頃から開始され、新羅が対唐外交を背景に倭国への形式的服属からの離脱をはかる 622 年頃から下火となり、646 年に停止するとした（山尾幸久 1989）。これを踏まえ、藤ノ木古墳等の新羅系馬具の優品は、6 世紀後半に倭と新羅の正式な国交を通じても齎されたとの見解が朴天秀氏（朴天秀 2009）や土生田純之（土生田純之 2010）によって示された。

桃崎も新羅系の鳳凰文・龍文・唐草文等の馬具類のうちに、「新羅の調」「任那の調」にかかる舶載品が含まれていると考え、これらの馬具を保有する古墳の被葬者は、新羅使や任那使の迎接に関わったと考える。最密集地である玄界灘沿岸では船舶で来航した使節の出迎えを首長間で交代で担当したと想定する。一方次郎塚例は、瀬戸内航路への中継を担った可能性が考えられる。

## （3）心葉形三葉文鏡板・杏葉の検討

次郎塚古墳前庭部出土の鉄地金銅張鏡板付轡もしくは杏葉の細片は、退化型式の心葉形三葉文鏡板・杏葉の立聞直下部分の残欠と考えられ、垂直に垂下する隆帯の両脇に上向き鉤状の突起があったと推定される。行橋市福島家コレクション、広島県安芸高田市高宮町上野部古墳、岡山県津山市二宮大成 I 区古墳、岐阜県古川町信包八幡神社古墳、静岡県池田山 2 号墳、群馬県上滝古墳などに近い形状と時期であれば、TK209～TK217 期に下降する最新段階の型式とみられる。

退化型式の三葉文杏葉について、最近、静岡県長泉町原分古墳の考察で検討が行われ、文様要素が有鉤系列と無鉤系列に、製作技法が文様板別被・文様板一体被に大別されることを指摘し、TK209 型式期～飛鳥 I 期後半にかけて使用されたとする（静岡県埋文 2008）。

こうした新式の心葉形三葉文鏡板・杏葉は、鏡板・杏葉が同形同法量同意匠の「ともづくり」と呼ばれる金銅製馬具の 1 種である。その出現を考える上で重要な資料が、奈良県広陵町の牧野古墳（円墳・径 60 m）で、TK209 型式古段階の須恵器とともに、心葉形三葉文鏡板・杏葉 2 セットが出土し、各々文様板別被・文様板一枚被せで製作技法が異なっていた。

牧野古墳は 587～600 年頃没した押坂彦人大兄皇子墓説が有力だが、石室内には複数の石棺が想定される。押坂彦人大兄は敏達天皇（位 572-585）皇子で、息子は田村皇子＝舒明天皇（位 629-641）である。忍坂部をはじめとする押坂彦人大兄皇子伝来の私領は「皇祖大兄

御名入部」と呼ばれ、息子の舒明から孫の中大兄皇子（後の天智天皇）へと引き継がれ、大化の改新後（646）に国家に返納されたと考えられる。彦人大兄の系統が蘇我氏や上宮王家に対抗して舒明即位から大化の改新の実現を可能にしたのは、こうした財政的裏付けがあったからとする見方もある。よって忍坂部（押坂部）が、心葉形三葉文鏡板・杏葉の担い手の候補となる。

敏達天皇と息長広姫の間に556年頃に彦人大兄皇子が誕生すると押坂部が設置されその養育にあたった。押坂宮に各地の押坂部の村から集まった貢納物や近侍者の管理に代々あたった氏族が押坂部造であったとする（山尾幸久1989）。直木孝次郎氏は山背大兄王の斑鳩宮を蘇我入鹿勢が攻囲した際、「数十舎人」が防戦したとされる記事を踏まえ、惣領的氏族をもたない舎人氏族が直接天皇・皇族に隷属し、皇子に仕えて、軍事的任務に服しその伝統によって、門号にウジの名を残したと述べる（直木孝次郎1972）。『日本書紀』敏達紀十二年（583）条にみえる、大伴金村に仕えた、「火葦北国造、刑部鞞部阿利斯登」は、その子日羅が百濟宮廷に第二官の達率として仕えており、刑部の名代化には百濟宮廷制度の影響も考えられる。

また『日本書紀』推古天皇十六年（608）八月条には、額田部比羅夫が隋使裴世清を海柘榴市に迎えた際、75騎の飾馬で出迎えた。推古天皇十八年（610）十月にも額田部比羅夫は新羅の客を出迎えたが、こうした場面では、参集する飾馬の馬装統一が図られたことが当然予測される。

以上、ともづくりの金銅装馬具類は、個別形式の遺例が数十点程度で、6世紀後半～末に出現したのち数段階の型式変遷を経て7世紀中葉に消滅する点から、壬生部・額田部・刑部などの名代部の成立と密接に関わって出現し、皇子宮に勤仕する舎人の装備として使用され、斑鳩宮の滅亡（642）や大化改新後の名代部の廃止（646）で製作が停止したと考えられる。

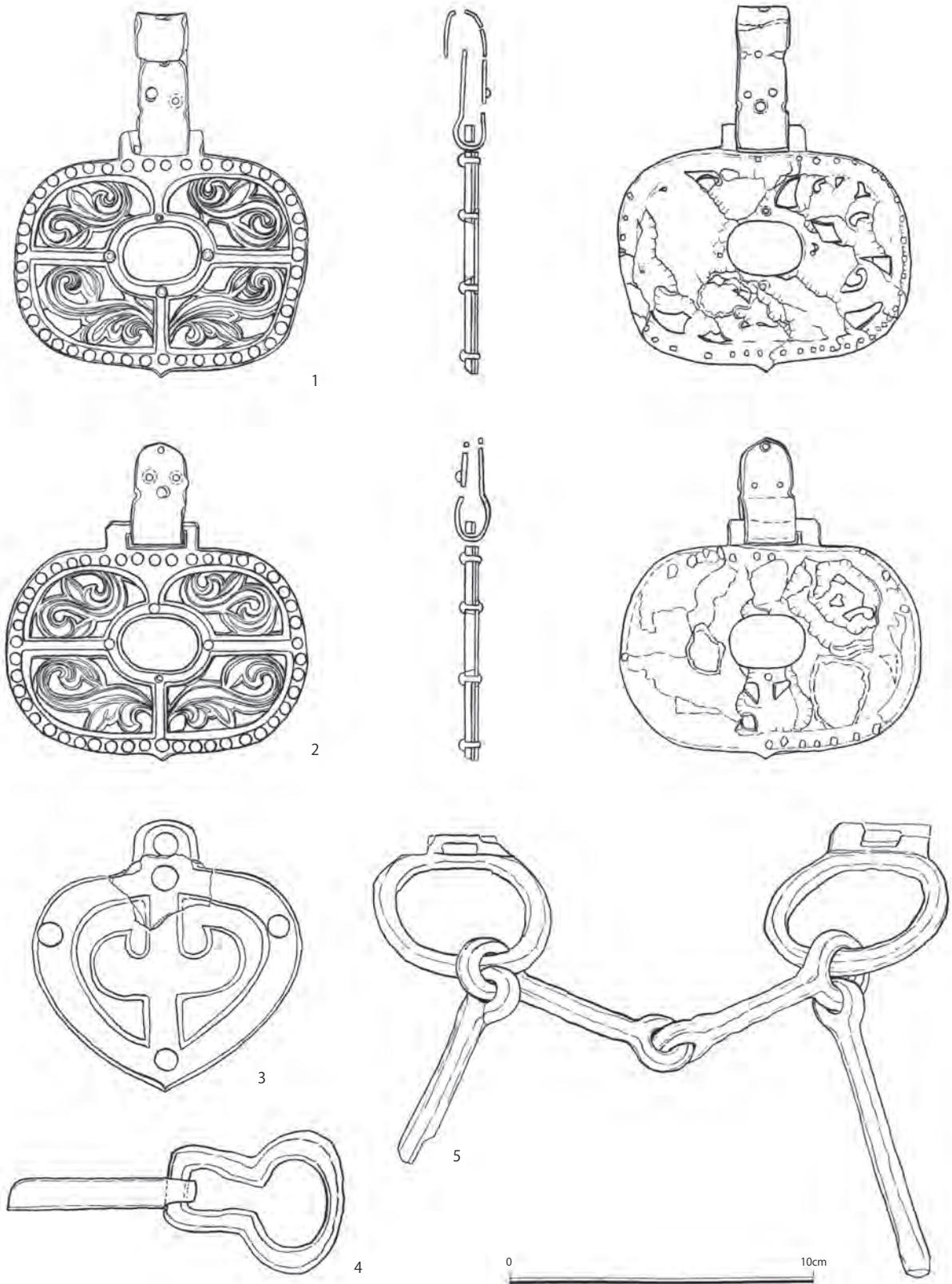
退化型式の三葉文鏡板・杏葉出土古墳と刑部の分布には対応関係が認められ、岡山県津山市松原二宮大成古墳の所在する津山盆地周辺では、岡山県真庭市佐波良（美作郡大庭郡）の形部神社がある。広島県安芸高田市高宮町の上野部古墳は三次盆地に近い備後国三谿郡に所在し、同郡には刑部郷がある。福岡県北九州市日明一本松古墳でも、心葉形三葉文鏡板・杏葉が出土したが、北九州市朽網南塚遺跡出土木簡には、「(企救) 郡の圖生刑部忍国と(国圖) 生調勝男口」を派遣し土地争いを調停した記事がある。福岡県粕屋郡宇美町の岩永浦1号墳でも、心葉形三葉文鏡板・杏葉が出土した。大野城市牛頸本堂遺跡7次調査で「押坂」刻書須恵器（7世紀）が出土した。

よって実相寺古墳群の築造集団からは、刑部の舎人を輩出した可能性が考えられる。

本稿をなすにあたり、武末純一先生より馬具写真を、秦広之氏より関連資料を提供いただき、また宮代栄一氏からは、件の鏡板について種々ご教示賜った。記して御礼申し上げたい。

#### 主要参考文献（報告書は割愛した）

- 池ノ上宏・花田勝広 2000 「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第85巻 第1号 pp. 19 - 56.  
諫早直人 2013 「馬具の舶載と模倣」『技術と交流の考古学』岡内三眞編 同成社 pp.348-359.  
内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』  
島根県八雲立つ風土記の丘資料館 pp.42-47.  
内山敏行 2003 「古墳時代後期の諸段階と甲冑・馬具」『後期古墳の諸段階』第8回東北・関東前方後円墳シンポジウム p.43-58.  
小田富士雄 1980 「筑前・宮地嶽古墳の板ガラス」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』同書刊行会 太宰府 pp.537-552  
鈴木英夫 1983 「『任那の調』の起源と性格」『国史学』119 国史学会 pp.23-49.  
玉城一枝 1987 「中国・朝鮮系の文様をもつ馬具について—杏葉・鏡板を中心として—」  
『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』  
千賀久 2003 「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」  
『東アジアと日本の考古学』Ⅲ交流と交易 同成社 pp.101-127  
土生田純之 2010 「古墳時代後期における西毛（群馬県西部）の渡来系文物」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集 pp.181-195.  
八賀晋 1995 「飛騨の古式古墳について」『飛騨と考古学』飛騨考古学会 pp.219-231.  
宮代栄一 2012 「大分県出土の古墳時代馬具の検討」『平成24年度九州考古学会総会 研究発表資料集』pp.51 - 60.  
桃崎祐輔 2002 「九州地方における騎馬文化の特質と軍事的背景」『考古学ジャーナル』496 pp.15-19.  
桃崎祐輔 2014 「馬具からみた九州の地域間交流—舶載馬具と国産規格品馬具に着目して—」  
『九州前方後円墳研究会 古墳時代の地域間交流2』pp.188-229.  
山尾幸久 1989 「『任那の調』の実態と性質」『古代の日朝関係』塙選書93 塙書房



1 次郎塚鏡板 A トレース図 (武末純一先生撮影写真よりトレース。断面図は概念的に作図) 2 次郎塚鏡板 B トレース図 (武末純一先生撮影写真よりトレース。断面図は概念的に作図) 3 次郎塚心葉形変形三葉文杏葉推定図 (別府大学作図の破片実測図より推定復元) 4 次郎塚鞍鞍鉸具トレース図 (大分合同新聞昭和 33 年 6 月 8 日掲載写真よりトレース) 5 次郎塚方形立開付素環轡 (大分合同新聞昭和 33 年 6 月 8 日掲載写真よりトレース)

第 96 図 実相寺古墳群次郎塚古墳出土馬具トレース図・復元想定図



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 A (表面)



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 A (裏面)



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 B (表面)



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 B (裏面)

写真 11 実相寺古墳群次郎塚古墳出土馬具